

495 Stage IV 食道癌の治療と成績

名古屋大学第2外科

松井隆則、秋山清次、関口宏之、藤原道隆、小田和重、齋藤理、陳鶴祥、須田賢、秀村和彦、安藤秀行、伊藤誠二、金光幸秀、笠井保志、伊藤勝基

【目的】Stage IV 食道癌の治療と予後について検討した。【対象】最近10年間でわれわれが治療したStage IV 食道癌120例（非手術34例、C0 20例、C1以上66例）を検討対象とした。補助療法は、術前化学療法20例、術後化学療法47例、術前放射線療法3例、術後放射線療法26例を施行し、手術単独症例は19例であった。【結果】C0症例の予後は悪く、1例の長期生存例を除き、他は2年以内に死亡した。生存率は非手術例と同等で、C1以上症例と有意差が見られた。補助療法別では、A3術前化学療法症例でdown stagingが可能であった症例では良好な成績が得られた。【考察】Stage IV 食道癌の治療では、いかに患者のQOLが良好な期間を長くするかが重要と思われる。今回の検討から結論すれば、C0手術は行うべきではなく、今後、術前検査にてC0症例を手術適応から的確にはずすことが必要になると思われる。また、A3の術前化療によるdown stagingはC0で本来手術適応なしとなる症例のsalvageの可能性を示しており、今後さらに検討していく課題であると考えられた。

496 Stage IV 食道癌切除例・非切除例の比較検討

富山医科薬科大学第2外科

田内克典、坂本隆、山下巖、榊原年宏、斎藤光和、清水哲朗、塚田一博

【目的】手術時診断でStage IVであった食道癌切除例と推定Stage IV食道癌非切除例の予後・QOL等を比較検討し治療法の再評価を試みた。【対象・方法】1979年10月より1997年12月までに当科で経験した手術時Stage IV 食道癌切除例59例、推定Stage IV 食道癌非切除例35例を対象とした。【結果】切除群と非切除群で治療後生存期間、退院後生存期間、在院日数、在宅期間、在院死で有意差はなかった。非切除群の生存率で治療効果別・Stage IV因子別・占居部位別で有意差を認めた。治療効果別では奏効例に予後良好で、Stage IV因子別ではM因子、A因子、N因子の順で予後不良で、局在別でIuが予後不良であった。【考察】手術時Stage IV 食道癌に対する切除は集学的治療を施行した非切除例と比較して有益とは言いがたい。非切除群では集学的治療が無効例で予後不良であり、無効例の多くは治療が中断されており、治療完遂できうる治療法の選択が重要である。切除群・非切除群ともに在院死亡率が高く、Stage IV 食道癌に対する治療法は画一的な長期間の治療は避けるべきであり、短期間にdown stagingが可能なが治療法の開発が望まれる。

497 多剤併用化学療法を施行した Stage IV 食道癌切除例の検討

群馬大学第2外科

川島健司、大和田進、中村正治、竹吉泉、川島吉之、小川哲史、佐藤啓宏、山田敬之、川手進、森下靖雄

【目的】教室において多剤併用化学療法施行後切除を行ったStage IV 食道癌症例について検討した。

【対象と方法】初診時Stage IVと診断され、多剤併用化学療法施行後に切除された11例を対象とした。術前Etoposide, Leucovorin, 5-FU, CDDPの化学療法を行った。全例が右開胸開腹、3領域郭清術を施行された。

【結果】Stage IV 因子（重複あり）はA3:8例、N3(+):3例、N4(+):3例であった。術前化学療法の効果判定はCR:1例、PR:6例、NC:4例で、奏効率は64%であった。A因子について8例中5例においてdown stagingできた。切除標本の病理組織との比較検討では、N因子についてdown stagingができた症例は1例のみであったが、A因子については8例中7例でdown stagingでき、全11例中5例で治癒切除となった。予後については無再発生存例が3例あり、観察期間は49ヵ月、45ヵ月、10ヵ月である。

【結論】多剤併用化学療法後の切除術は、Stage IV 食道癌に対して試みられるべき治療と考えられる。

498 治療法別予後からみたstage IV 食道癌切除例の検討

獨協医科大学第二外科

大井田宗継、門馬公経、濱田清誠、中野智文、山口英見、堀江徹、小原靖尋、宮田秀夫、大盛芳路、小暮洋暉

目的:外科的切除されたstage IV 食道癌症例を治療法別に分類し、治療法と予後との関係を検討した。

対象と方法:組織学的にstage IVと診断された50例。年齢は38~84歳、男女比は42:8、組織型は46例が扁平上皮癌で、その他4例である。術前治療法をI群:非治療群、II群:放射線治療群、III群:化学療法群、IV群:放射線+化学療法群に分け、術後治療法を1群:非治療群、2群:放射線治療群、3群:化学療法群、4群:放射線+化学療法群に分け、治療法と予後の関係について検討した。成績:全体の生存率をKaplan-Meier法で見ると、5,3,1年生存率はそれぞれ9.3%,23.3%,66.2%であった。術前治療法別の5年生存率は、I群12.6%,II群7.7%,III,IV群0%であった。術後治療法別の5年生存率は、各群27.7%,6.3%,0%,0%で、I群が最も良好であった。

結論:stage IV 食道癌で切除可能症例の術前治療は、術後の生存率向上には結びつかなかった。また、術後治療では、いずれも長期予後には影響しなかったが、化学療法施行群で生存率の向上がみられた。